岡谷市の義務教育を考える

【保護者・地域共有通信】

学びの架け橋

第２号
R7.6.6 発行
発行者
岡谷市教育委員会

今月の話題

「おかやのまちじゅう学園化構想」を推進する上で、市内小中学校間における交流の充実は大切な取組の一つです。岡谷市における**訪問型交流**と**ネットワーク型交流**のこれまでの取組と今後の展望についてお伝えします。

「おかやのまちじゅう学園化構想」

(1)市内小中学校の学校群化
(2)訪問型交流とネットワーク型交流のスタイル構築
(3)おかや絹結プログラムの充実と実践
(4)岡谷版コミュニティ・スクールへの移行
(5)市内全域への小中一貫教育の基盤づくり

いじめ根絶子ども会議

卒業を控えた小学６年生の子ども達が、中学校への円滑な移行を目的として、中学校見学をしたり、体験授業をしたりすることには、これまでも大切に取り組んできました。これは、岡谷市に限らず多くの市町村で取り組んでいます。

岡谷市では、さらにこれに加え、平成 25 年度より小中学生が協働参画する「いじめ根絶子ども会議」を開催してきました。令和７年度で 13 回目の開催となります。

いじめ根絶子ども会議Ⅰ：中学校区ごとに開催。児童会役員（小学校）と生徒会役員（中学校）が中心となって、いじめ根絶の取組について計画立案。

いじめ根絶子ども会議Ⅱ：中学校区ごとに開催。小学６年生全員と中学生全員が参加。小中学生が一緒になって、いじめ根絶について話し合う。

いじめ根絶子ども会議Ⅲ：全市で共同開催。各小中学校の代表者が参加。中学校区ごとの取組について発表し、意見を交流する。

←**いじめ根絶子ども会議Ⅱ**
同一中学校区の小６～中３までの全ての子ども達が集まり、いじめ根絶についてグループごとに協議。

いじめ根絶子ども会議Ⅲ→
全中学校区の代表児童・生徒が参集し、それぞれの取組について意見交流。

岡谷市のこの取組は、小中学生を中心に据えた訪問型交流の一つです。このように直接顔と顔を向き合わせる訪問型交流では、

〇文章や言葉での意思疎通に加え、口調、表情、身振り・手振りなど非言語を含めた包括的なコミュニケーションにより、子ども同士のより深い相互理解を図ること。

〇時間と空間を共有し、近い距離感で互いに関わり合うことで、相手との一体感や協働意識を高めること。

などを大切にしてきました。自校での学習をもとに他校の児童生徒と学びを共有し、さらに新たな学びに向けて協働することは、学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を具現する要素を大いに含んでいます。

今後、市内小中学校の一貫教育を推進していくとき、訪問型交流を一層充実させていくとともに、ネットワーク型交流の可能性を探っていくことが求められています。

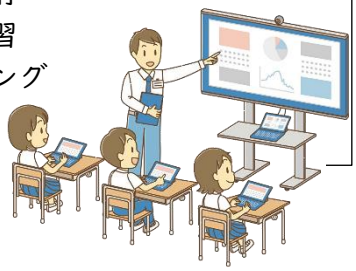
では、ネットワーク型交流とはどのようなものでしょうか。

ネットワーク型交流とは？

近年のＩＣＴ（Information and Communication Technology 情報通信技術）の発達はめざましく、岡谷市でも令和３年度からすべての学校に一人一台端末（タブレット）が導入されました。導入から４年が経過し、各小中学校でのＩＣＴ活用は次のように着実に進んできています。

小中学校におけるICT活用実践例

○調べ学習でのインターネット検索
○子どもの意見発表の際の提示
○プレゼンテーションや動画の作成
○異校間の協働授業
○欠席児童生徒への授業配信
○教師からの教材提示や配信
○子ども同士の意見共有
○基礎定着のドリル学習
○オンラインミーティング
○欠席連絡や家庭連絡



ネットワーク型交流とは、これまで学校ごとに取り組んできたＩＣＴ活用をさらに拡張し、異校間の子ども達や教員が協働して活動に参画し、お互いの学びや取組を深め合うことを指します。

岡谷市における実践は途上ですが、次のような可能性が展望できます。

オンライン型交流の可能性

○単級で少人数の学級の子ども達が、他校の学級とオンラインで協働学習することで、多様な考えに触れて学びを深めることができる。
○総合的な学習の時間の取組について、オンラインで意見交換することで、他校の取組を知ったり、異なる視点から自分たちの取組を見つめ直したりすることができる。
○図工や美術の作品をオンラインで鑑賞し合うことで、様々な作品のよさに触れ、自分の作品を振り返ったり、制作への意欲を高めたりすることができる。
○専門性を持った教員がオンラインで他校の子どもに授業することで、専門性に裏打ちされたより質の高い学びの場を提供することができる。
○同学年や同教科を担当する教員同士がオンラインで会合を共有することで、お互いの取組のよさを取り入れたり、課題を解決し合ったりすることができる。

訪問型交流とネットワーク型交流の両輪で

訪問型交流で顔を合わせたり、言葉を交わし合ったりして、時間と空間を共有することは、交流に参加する子ども達同士の関係づくりの上で欠かすことができません。一方で、学校間を移動するための時間確保や児童生徒輸送の便宜を図ることなどが課題として挙げられます。

これらの課題を解決する一方策がネットワーク型交流です。特に、施設分離型小中一貫校では、ネットワーク型交流の充実が必要不可欠になると考えられます。訪問型交流とネットワーク型交流のそれぞれの利点を活かし、子ども達の学びを豊かに広げていくことが、これからの学校運営には求められます。